松本大学と地域がつながる情報誌　MATSUMOTO UNIVERSITY "TSUNAGARU" MAGAZINE

50号記念

ゆめ通信

地域づくり考房 ゆめ

Vol.050
2022 9.30

特集 ONE TEAM プロジェクト

学生プロジェクト活動紹介（YUME column）／発行50号記念座談会／ゆめカフェ／#つぶやき

地域づくり考房『ゆめ』
キャラクター　こう坊

考房『ゆめ』は松本大学の全学生を対象に、学生と地域住民とのふれあいを大切にして取り組む地域連携活動の支援を行っています。

ごあいさつ

今年度の前半も、コロナの状況を確認しながら実施できた活動、残念ながら中止にした活動もあります。実施できるかどうかもがきながらもアイデアを出し合い模索していく学生の様子に、諦めない心の大切さを学ぶことも多くありました。withコロナの時代になり、もどかしさや悔しさも感じてきましたが、学生の心の火は消えません。また、そのような状況だからこそ、顔を合わせて話ができること、地域の方と関われることに改めて幸せを感じます。

そして、ゆめ通信が今号で50号になります。特集記事も掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

学校法人松商学園
松本大学

特集

ONE TEAM（ワン チーム）プロジェクト

概要

地域づくり考房『ゆめ』では、学生の地域活動の「第一歩」として、「ONE TEAMプロジェクト」を企画しています。地域に生きる人々の想いを知ることを目的に、様々なテーマのもと活動しています。今号では、5月～7月に行った活動を紹介します。

6月 「新村と奈川をつなぐバスハイク」
～野麦街道をたどる旅～

感染レベルが下がった6月、「ひといき」の学生の中から「地域の皆さんと外へ出ましょう!」といった声が沸き上がりました。そこで同じ野麦街道の沿線にある「奈川地区」を目的地としたバスハイクが計画されました。募集を始めると「ひといき」の活動を通じて親しくなった地域の方々をはじめ、日頃は家に閉じこもりがちのお年寄りも互いに誘いあうことで参加者が増え、30名近い参加者となりました。6月18日の当日、お年寄りと学生の笑顔で溢れたバスは、松本大学から北アルプスの古道を巡りながら新緑が美しい奈川へと向かいました。

途中、稲核風穴の里にある「安曇資料館」に立ち寄りました。戦前戦後に使われた昭和の農機具や機織り機を物珍しそうに見入る学生に、お年寄りが若いころの体験談を話す微笑ましい姿が見られました。目的地の「奈川地区」にお昼に到着し、山間地ならではの旬の山菜の食事をいただきました。午後の学習会では「(株)ふるさと奈川」の小林新蔵さんをはじめとした関係者の皆様にお世話になり、滞在型観光施設「クラインガルテン奈川」の見学や「奈川地区」の歴史についても説明をいただきました。また、奈川と新村両地区の取り組みや課題をもとにした意見交換も行われました。過疎化に悩みながらもその魅力を絶え間なく発信する奈川地区の取り組みは、学生や新村の人たちにとっても今後の地域づくりを考えるうえでも大変参考になりました。ほんの梅雨の合間の一日で行った「小さな旅」でしたが、参加したお年寄りをはじめとした地域の方々や学生にとっては、いつまでも心に残る思い出の旅となりました。茶房「ひといき」プロジェクトの年齢を越えたこのような交流は、これからも多くの人たちに元気を与えていくと思います。

野麦路（のむぎじ）を辿（たど）る奈川への旅

小一時間の「野麦街道の旅」で、私は新たな場所を知ることができました。いつもなら道の駅「風穴（ふうけつ）の里（さと）」で一休みが定番ですが、今日はその手前の松本市安曇資料館に立ち寄り稲刻（いねこき）・水殿（みどの）・奈川渡（ながわど）と続く梓川の各ダムの歴史や時代を感じる調度品を見学しました。お年寄りは思い出を語り、学生たちに昔を話しています…とても良い雰囲気でした。

みどの工房での深山織（みやまおり）の発見も土産話（みやげばなし）になりそうです。

バスの終点は奈川地区です。昼食は、もちろん蕎麦（そば）そして山菜（さんさい）です…美味（おい）しかった。

旅の締めくくりは大原クラインガルテンです。都会人の「癒（いや）しの田舎暮（いなか）らし」の場所として注目されています。

私も山野（さんや）の眺望（ちょうぼう）に「原風景（げんふうけい）」を想い、旅の終わりとします。

新村地区　日詰

学生の感想

先輩方を見て、勇気を出して地域の方々に話しかけることができた。色々と昔の生活についてや、山菜そばの美味しさを語ったりできて今回は話しかけることができて本当に良かったと思った。（短大2年　奥原）

5月 5月21日(土曜日)「地域ビジネスに活かす農業」

雨

「雨降って地固まる」四賀の棚田は、粘りと赤土の肥沃な大地へと変わってきました。

かまくらやの皆様、地元のボランティアの皆様のおかげで、学習の場に苗を植え、清き水で育て、実りを実感させて頂いています。合羽と田植え用の長靴に身を包んでの体験は、四賀の粘りある土と人々の温かさを知るには良い機会となりました。寒く、泥紛れの半日もあっという間に終わり、おいしいメンチカツのお弁当が学生を癒してくれました。午後は、四賀の人々の暮らしや歴史、農業・養蚕業などの話を四賀出身の佐々木清夫さんにご講演頂き、かまくらやの社長 田中浩二さんからは、棚田再生のお話や農業を産業として生活していくために歩まれた事などをお聞きしました。今回は、雨で急遽、かまくらやの従業員の方と一緒にお聞きすることとなり、同世代の皆様の苦労や経験、悩みや喜びなども知ることができ学生にとっては大変貴重な体験となりました。

学生の感想

かまくらやの社員の方がおっしゃっていた横の人を助けながらみんなで頑張れるのが機械には無い田植えの良さということを大学生活でも活かしていきたいと思った。自分だけで突っ走るのではなく周りをみて行動できる人になりたい。

（観光1年　中垣）

7月 「梶原農園」と「Sabouしが」の魅力を堪能

7

7月16日(土)「地元野菜の魅力と人とのつながりについて考える」をテーマに学生7名が参加し、松本市四賀地区在住の梶原啓・知子ご夫妻の畑で、ネギの植え替え作業を実施しました。約2時間の作業で2000株以上のネギを植え替え、暑さ厳しい中汗をぬぐいながら熱心に取り組みました。

作業終了後は、古民家カフェ「sabouしが」へ移動し、梶原ご夫妻に東京よりIターンをして農業を始めた経緯や、農業に対する熱い思いを語っていただきました。

その後、昼食をはさみ「sabouしが」を経営する田中ゆかりさんのお話をお聞きし、都内よりUターンして松本市四賀地区で食堂を経営しながら、キッチンカーでお弁当を売り歩き、さらに地域の皆さんと協力して、四賀地区を宣伝する取り組みをしていること等を中心に思いを語っていただきました。

学生も興味津々に話を聞き、苦労話や今後の夢などについて積極的に質問をしていました。農業の魅力や地域連携について、多くの見識を深められたよい機会となりました。

学生の感想

梶原夫妻のお話は、「日々勉強、学んだことを畑で実践」という言葉が印象に残りました。自分の畑で実践したことを誰かに教える。その過程でできた仲間が日本の食料・国力を支えていくというお話はとても興味深かったです。

田中さんのお話からは、料理へのこだわりについて、一つひとつの食材に生産者がいて、生産者の数だけ想いがあること。地元の食材を使用し、素材そのものの味を活かすことで、料理を通してその想いを伝えること。普段何気なく食している食材にも、たくさんの想いが詰まっていて、食材の産地の気候や地形、どんな人が作ったのかなと考えるだけで、食事が楽しくて豊かになるなと感じました。

（観光3年　工藤）

YUME column

学生プロジェクト活動紹介

「すすはなプロジェクト」8月10日花火大会

コロナ禍、夢と希望の花火が空一杯に上がりました。3年ぶりの花火大会で地域も学生も、待ちに待った夏の一夜となりました。プロジェクトは、新規メンバーが加わり、すすはな散歩（筑摩地区を探索する活動）が良かったのか、昨年以上に交流が深まり、活気あふれるミーティング風景でした。富士電機さんの皆様も昨年のアンケート集計と学生提案が良かったのか、何度も『ゆめ』に足を運んで頂き、コロナ禍でできる花火大会を学生に考えてもらいたい。無観客開催などを訴えながらFM松本で広告を作成し、花火大会をテーマにラジオドラマを作ってほしい。うちわの作製もと色々提案されました。全員参加が叶わなかった今回、当日のユーチューブ配信と場内案内の司会の二人は、プロジェクトの代表として見事な大役を果たしてくれました。この参加が、みんなが決めたユーチューブのスクリーンショットコンテストも実施することとなり、短時間に寝ずの努力をして得たひと夏の経験は、心に残る素晴らしい思い出となったことと思います。

学生の感想

リーダーとして、チームをまとめるのが大変でしたが、雰囲気が良くなってきたと思います。特に頑張ったことは、すすき川花火大会の宣伝です。ラジオCMの作成は短期間でしたが、とても良い原稿が出来て皆で楽しく収録しました。とても良い花火大会だったと思います。　（観光2年　鈴木）

大学生になり、初の自分が関わる大きなイベントに、期待と不安がありました。ですが、先輩方や職員の方、企業の方など、皆さんとても優しい方ばかりで、楽しみながら、準備や、当日の司会を務めることができ、良い経験になりました。

（総経1年　植木）

3年ぶりの花火大会開催で1つ1つの活動に熱が入りました。短期間で依頼に応えるのは大変でしたが、メンバーの協力にも助けられ何とか全て完遂することができました。花火大会当日は、花火を見終わったあとは込み上げてくるものがありました。今年は花火大会が無事に開催できて、すすはなとして本格的な活動が行えて本当に感謝です。　（総経4年　林）

感染レベルが上がることで中止や延期となったプロジェクトから

CorderDojo 松本@松本大学

子ども達が自由な発想で好きなプログラミングをできるように、大学生がプロのエンジニアの方々と共に子どもたちを指導する「CoderDojo松本@松本大学」が、7月23日に3年ぶりに開催される予定でした。このイベントのために主催者のCoderDojo松本代表の濱田康さんと学生たちは打ち合わせを重ねながら準備を重ねてきました。参加希望の子どもたちも多く、多くの皆さんが期待していたイベントでしたが、7月に入り感染レベルが急上昇し、特に近在の小学校の感染が拡大したため直前になって延期を余儀なくされてしまいした。プロジェクトの学生たちは感染の終息を祈りながら松本大学での次の開催の機会を探っています。

学生の感想

新体制になり、メンバー交流や打ち合わせをしてきました。メンバーの講習会も行いたいという案があり、メンバーの参加意欲が高いのが感じられて嬉しかったです。残念ながら前期は開催できなかったものの、次回はいつやるか、運営はどのようにやるかなど、みんなで話し合いながら次の開催を楽しみにしたいと思います。　（教育4年　名古）

7月 ひといき
～「七夕まつりで短冊に願いを」～

茶房「ひといき」は「新村多目的研修センター」を会場に、感染防止に配慮しながらも定期的に行ってきました。特に学生と住民が知恵を出しあいながら、毎回心温まる企画を準備して活動を続けています。しかし今年はコロナ禍の夏、会場にエアコンがないために、マスクをしながらの交流は参加者には熱中症の心配がありました。そこで学生たちは、7月21日に「ひといき」の会場をエアコンのある大学の食堂に移して、「七夕の短冊づくり」を企画しました。地区にはコロナ禍のために、遠くの親戚や知人と疎遠になっているお年寄りもおります。学生はそんな方たちにも短冊づくりを通じて話題を広げ元気になってもらおうと考えました。学生も地域の方も、長期に続く行動制限で互いに寂しい想いを共有しています。会場では、地域の方と学生が交互に座りながら、それぞれの想いを短冊に書きながら願いを託していました。世代を超えて集まった人々の願いが七夕として飾られました。大きな七夕が出来上がった時、「ひといき」プロジェクトの学生たちがまたひとつ地域の人たちとの絆を深めたように思われました。

学生の感想

前期はメンバーがアイディアを出し合い、目標であった「また来たい」と思えるひといきを開催できました。地域の方からは開催を待ち望む声も上がっており、地域に欠かせない「居場所」になってきています。この「居場所」を今後も絶やさないように、頑張っていきたいです。（総経3年　大住）

地域と学生それぞれの役割を大切にし、お互いにとってより楽しい居場所になるように心がけました。交流のきっかけとなる名札づくりや季節に合ったイベントを行い、温かい雰囲気の中で地域の方々とのつながりを深めることができました。（観光3年　小林）

子供たちの活気あふれる笑顔と共に
～キッズホッケー開催～

小学生を対象とした「キッズホッケー」を5月に2回、新村児童センターで開催しました。このキッズホッケーは、子供たちに技術的なことを教えるのはもとより、ホッケーを通して仲間や道具、ルールの大切さなどを伝えることも活動の目的としています。

最初にスティックとボールを手に取り、この扱いに慣れることから始めました。初めてスティックを手にする子供たちがほとんどだったので最初は悪戦苦闘。しかし、学生の丁寧な支援のもと徐々に扱いにも慣れ、ペアでボールをパスし合う練習では、相手がキャッチしやすいことにも気を配りながらボールを打ち合っていました。また、コーンを床に置きジグザグにドリブルする練習では、出来るだけ小回りして速く進むことに戸惑いながらも、真剣な眼差しで何度も繰り返し行っていました。そのおかげで子供たちも上達が早く充実感あふれる笑顔に満ちていました。学生にとっても、教えることの難しさを実感しながらも、充実したひとときとなりました。

学生の感想

1年生の子どもたちは初めてのホッケーで、慣れないことでも一生懸命取り組んでいる姿が印象的でした。上級生の子どもたちとは学生も一緒になって試合をやりましたが、元気いっぱいの子どもたちに圧倒されていました。今後も、子どもたちや児童センターの職員の方々との繋がりを大切に、楽しく活動していきたいです。（スポ4年　小澤）

50号記念特集

松本大学と地域がつながる情報誌

ゆめ通信

『ゆめ』歴代運営委員長

座談会 START!!

大野 ゆめ通信発行50号ということで歴代の『ゆめ』運営委員長の皆様に思い出を語って頂ければと思い集まって頂きました。振り返りながらお話しください。

白戸 開学から大学のコンセプトとして地域と連携するということに力を置いてやってきましたが、3年目くらいで大学が落ち着いてきたころですが、もっと踏み込んで学生が地域に働きかけて地域づくりを考えていこうということになりました。そこで、「コミュニティビジネス」をキーワードに議論を進めていたところ、県からも同じキーワードで地域に働きかけるための連携のお話が出てきました。そこでNPO法人の「コミュニティ支援センター」の立ち上げを申請しましたが、一部関係者から地域を主体とするためには不用意な教員の介在を危ぶむ声もあったりして、給与の形態をとらずに外部から有識者を招いて御礼をする形態で、教務の配下に組織をつくりました。このように当初は教員の介在を薄くして、学生が地域と繋がることを支援する形で、場所も4号館や2号館などへと点々と動きながら始めたような状況です。名称も他大学を参考に「考房ゆめ」としました。『ゆめ』は、夢や結芽(ニーズの目を結ぶ)の意味を重ねています。

大野 きっかけは、県の施策も影響していたということですね。

白戸 当初から教員の位置づけは薄く、学生が地域に繋がることのサポートがメインでした。したがって、対象の学生も少し目的意識や学力の高い学生に目を向けていたような気がします。レベルの高い地域連携に目を向け、問題を抱える学生などの居場所づくりなどを考える意見とは反していました。このような点からは当初から意見や価値観がぶつかりあっていたと思います。
その後は、GPやCOC等の大学が地域の拠点づくりになるための国のいくつかの事業が足掛かりになりました。その中では地域にサテライトをつくったり、子どもたちを相手にした地域の人たちの活動にサポートしたりと、試行錯誤も繰り返されました。外部の人たちの様々な考え方の違いや学部間の軋轢などもあって揺れた時期ですね。

大野 当時は学部間の連携も薄く、情報の共有も少なかったということですか。

白戸 『ゆめ』の取り組みが、「学部」や「地域」との取り組みとの差別化が強く対抗意識が強かった時代かもしれません。公民館をはじめ地域で行う講座も、同じ松本大学でも、『ゆめ』か「学部」かで強く意識し合うため、逆に学生はそのお手伝いになるという歪んだ現象も起きてしまったこともありました。そのような事態を収拾して改革に取り組んだのが廣瀬先生の時代でした。

廣瀬 学生がやりたいことを抜きにしたら、学生の力などとても引き出せなかったんです。学生のやってきたことを引き出すのが教員で、そこではじめて学生が主役の形ができるんですね。

大野 立ち上がりの頃の、学生が社会と繋がるには先生はいらない、という極論が影響していたんですね。

白戸 当初は、『ゆめ』は地域の広告塔になって結果を先に求められていたのです。見学者も多く、逆に「こんなにたくさんできるんですか」と驚かれたりもしました。学生のペースで動くというよりも、予算の消化が先にあるからしっかりやれみたいな感じです。学生のためというよりも学校のため。失敗は許されないから頑張れみたいな状況ですね。

大野 白戸先生とは「デパートサミット」を長くやらせていただいていますが、そこで学んだことは、高校でも大学でも、学生の活動が外に向けたパフォーマンスになってしまうことは結構ありますよね。

廣瀬 できなくて当たり前なのに、予算や補助金などでやらざるを得ないところがありますよね。

大野 教育現場では予算を消化するとその評価に四苦八苦するという問題ですよね。

廣瀬 地域の人たちに、学生の成長が感じられることが大切だと思います。

大野 「上土」や「みすゞ屋」などに関した活動でも、地域の人たちは成長した学生の名前を今でも挙げてくれますよね。

白戸 廣瀬先生が『ゆめ』を今の形に戻してきたのが2015年あたりからですかね。

大野 その後向井先生に引き継いでいくときもご苦労はありましたか。

向井 『ゆめ』は「学生主体で地域に関わることで学生と考えていく場所だ」という基盤となる認識づくりを廣瀬先生が支えてきてくれました。そのため、そうした基盤となる考え方を、他の運営委員の先生方に認識してもらったり、「学生が何をしたいか」を軸としつつプロジェクトを進めることができるやり方へと変えていきました。現在の『ゆめ』の職員体制となっているのも、そのためです。校長先生や教

座談会

■総合経営学部 観光ホスピタリティ学科 准教授 向井 健(後列左) ■総合経営学部 観光ホスピタリティ学科 教授 白戸 洋(後列右)
■地域づくり考房『ゆめ』 専門員 大野 整(前列左) ■松商短期大学部 経営情報学科 准教授 廣瀬 豊(前列右)

員の経験を持った方、四賀をはじめとした地域との関わりや社会との関わりを持った方などが職員として加わってくださったことで、知恵を出し合いながら学生を主体とした活動を支える体制ができるようになりました。前の時代にはプロジェクトの駒になっていた学生が、今度は主体的になることを応援していくことができるようになってきたように思います。

大野 『ゆめ』のスタッフを考えるときに教育に明るい人、教育の資質が高い人が欲しいというのは、そういうところからなんですね。

向井 学部が増えてきましたが、学部の専門性だけでは地域の人たちへの支援は届かないんですね。『ゆめ』で活動することで、地域の人たちとの間で役割や信頼関係を創ったということは、学部の専門的な活動にも大いに役立つわけです。あらゆる視点で活動できる「ONE　TEAMプロジェクト」の意義も大きいですね。『ゆめ』の活動がサークル活動になる必要はないですし、やらされたり、こなしたりする活動になるのは心配ですね。

大野 それぞれのプロジェクトが、4月にただ先輩から仕事を引き継ぐのではなく、やりたいことをご破算にして考えることも重要だということですね。

廣瀬 個々のプロジェクトが競争したり取り合うのではなく、互いに一緒に活動したり支え合ったりすることが大切ですね。

向井 年度末の反省会で、互いの活動を報告し合い、知り合うことも大事ですね。

白戸 『ゆめ』については学部支援の形ではなく、学部を越えた学校全体の支援というやりかたで考えていた議論があったんですが、そのような次元の位置づけを認識しておきたいですね。

廣瀬 「これはうちの学部でやるから他ではやるな」、のような考えではなく、全体で関わることによって、それぞれの学部の長所が活かされるという考え方が大事なポイントです。

白戸 『ゆめ』のいいところは、地域貢献をすることではなく、失敗してもいいから、地域に迷惑をかけながらも成長していく、地域の人々から学生の成長に力を貸してもらう、そのゆっくりした時間を大事にすることなんですね。そして卒業するころに地域と繋がっていてよかったなあ、となることです。

大野 『ゆめ』には単位もないし、学部も横断している。そのメリットや良さをのばしていくことになるんですかね。

廣瀬 地域の人も学生と関わることで、学生や大学の理解がすすむ。若者が関われる地域になる支援をすることがスタッフの役割だと思います。

白戸 労働力として駒になるか、地域が学生を育てるかの違いが「ボランティアセンター」と区別するところですね。

大野 松本大学の学生は就職しても地域の人々に可愛がってもらっていますが、学生時代から上から目線でなく、地域目線で活動しているからなんでしょうね。特に『ゆめ』は1・2年生の時から活動して地域に対するモチベーションを上げていきますからね。

白戸 世間の流れはどこも「地域」といいますが、地域というよりも「役所」「企業」「学校」など目立つところに目がいってしまう。そうではなく、人と人との関係が大切で、結果良いプロセスを大切にしていくようにすればいいわけです。

大野 『ゆめ』という場所は、「開かれた学校づくり」の流れの中で、「コミュニティビジネス」をキーワードとして最初は行政スタンスで動き出して、「学生スタンス」の今のような形に変貌しながら成果を上げてきたということになるんですね。

白戸 コロナ禍の中で一番学生が動いているのが『ゆめ』だと思います。学生にとっても教職員にとっても居心地の良い場所になっていますね。
学生と地域、両方を見ながら適当な距離感をもって付き合える人が『ゆめ』のスタッフとしては大切なんでしょう。

大野 私は少ないですが他のスタッフには本当によく会いに来る学生が増えています。スタッフも学生とべったりしないで適当に距離感を持ちながらうまくやっていますね。

廣瀬 短大生の学生生活は2年間と短いんですね。4大生と交流することでより広い視野を学び、グローバルな考え方を養う場所として『ゆめ』に期待したいですね。

大野 今日は、『ゆめ』の歴史から今後への期待、そして進むべき方向まで貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。

新メンバー
募集中です!!

『ゆめカフェ』開催

活気が戻ってきた『ゆめ』の活動

今年度に入り13個のプロジェクト活動も徐々に活気が戻りつつあるなか、主に新1年生を対象とした『ゆめ』の新規募集説明会、通称『ゆめカフェ』をプロジェクトリーダー中心に開催しました。

ここ2年間は新型コロナウイルスの影響で、活動はもとより満足な勧誘や説明会が開催できませんでしたが、その2年分の想いを胸に、多くの仲間を増やそうと様々な工夫を凝らしました。

今年は初めて、全新入生を対象に自宅へ『ゆめ』の案内を事前に郵送。また、学生が参加しやすいよう4月下旬から5月中旬にかけ6日間の日程を設けるなどして開催した結果、新1年生を中心に約80名の学生が出席してくれました。

始めに13個のプロジェクトを全体で紹介した後、それぞれ興味のあるプロジェクトについて個別に説明を聞き、新入生も複数のプロジェクトの話に熱心に耳を傾けていました。

今後もコロナ禍での活動が続きますが、『ゆめ』の活動を通して新たな青春の1ページが刻まれることを願っています。

『#つぶやき』

#『ゆめ』に入った新メンバー

地域づくり考房『ゆめ』での活動は、在学中であればいつでも参加可能です。一緒に活動しましょう。

[詳しく知りたい]、[経験したい]、[興味がわいた]等、下記の松本大学 地域づくり考房『ゆめ』までお問い合わせください。

新メンバーをご紹介します!

興味のある事を学ぶだけでなく実践的な形で経験したいと思い『ゆめ』で活動し始めました。

コロナ禍ならではの様々な制限に葛藤しながらも、地域のお祭りに学生としてどう関わりどう盛り上げていくのかを考え企画するのがとても楽しいです。

地域社会に参加すると言う点でも、学びが多くやりがいを感じています。　（観光2年　登内）

編集後記

6月下旬以降、猛烈な暑さに見舞われた夏にも別れを告げ、早いもので秋風心地よい季節となった。コロナ禍３年目を迎え、徐々に『ゆめ』の活動にも活気が戻りつつあるが、まだまだ活動への制約も多く何となくぎこちなさが残る。そんな中、夏の全国高校野球大会で優勝した仙台育英の監督がインタビューで発した『青春って密なんで』の言葉が大きく心に響いた。本来は学生生活だって『密』なはず。早く学生が気兼ねなく活動でき、たくさんの笑顔に触れたい。そんな日を心待ちにしたいし、前向きに活動する姿を心から応援したい。　（聖樹）

お問い合わせ
松本大学 地域づくり考房『ゆめ』
〒390-1295 長野県松本市新村2095-1　松本大学内７号館２階
開館日時：月～金 10：00～18：00
TEL：0263-48-7213　FAX：0263-48-7216
E-mail：community@t.matsu.ac.jp

https://www.matsumoto-u.ac.jp/yume/

SNS　YouTube　Twitter　Instagram